化学・製薬・商社など インドで活躍する注目企業の動向

アヌパム・ラサヤン・インディア

工場増設、年産能力2倍超に

ニレシュ・ナイク
R&Dチーフ

農薬などの中間体メーカー、アヌパム・ラサヤン・インディア（本社・グジャラート州サチン）は、シングル・サプライヤーとして多くの中間体を世界に供給している。新たに2件の生産施設を建設しており、フル稼働後の年産能力は2・2倍に増える見込み。製造体制を大幅に強化して世界中の需要増に応え、さらなる成長加速を目指す。

サチンの本社敷地内と同州ジャガディアに、中間体製造の2ユニットを建設中。サチンのマルチパーパス・ユニットは、既存の2ユニットに隣接する3つ目のミラーサイトとして設け、顧客の生産調整などにも柔軟に対応する。年産能力は4000トンで、医薬向けなど農薬以外の中間体を製造する。約1000万ドルを投じた。年内にも完成し、商用生産を始める予定。

ジャガディアのユニットは、同社売上高の7割を占める農薬中間体・原体をラージスケール生産する拠点として建設を始めた。年産4500トンを見込む。まずは第1期工事で殺虫剤向け生産を始め、第2期にアリロキシフェノキシプロピオン酸系除草剤、第3期に殺菌剤と生産品目を拡大していく。まず向こう3年間で2500万ドルを投じる。

2ユニットの増設でアヌパムが生産できる中間体・原体のキャパシティは大幅に増える。今年度の売上高は4200万ドルを予想し、新工場での受託製造が本格化すると見込む2016～17年度には同8200万ドルに倍増させる計画だ。売上高の9割が海外由来で、日本も重要市場の一つ。定期的に自社の営業担当が訪日して直接販売しているが、今後の成長次第で日本国内に窓口を設けることも検討する。

サジャン・インディア

高付加価値品の受託拡大

M・P・アガルワール会長

印中間体メーカー、サジャン・インディア（本社・ムンバイ）は、新しい有効成分の中間体ビジネスを本格化する。小規模ながらも付加価値の高い製品は製造施設を整えるだけでも多額の設備投資が必要になるため、低コストでカスタム製造できる需要は大きい。同社はインド国内で新工場建設や既存施設の増強に取り組み、こうした新製品ニーズに柔軟に対応できる体制を整える。

日本では2011年に日本人による販売窓口を国内に設け、営業体制を強化している。顧客との競合を避けるため自社ブランドで製造・販売しない方針を貫き、農薬やスペシャリティー製品の中間体製造を中心に売り上げを伸ばしている。現在8～10社程度という日系顧客をさらに数社増やしたい考えだ。

アガルワール会長によると、日本や欧米の農薬メーカーから毎年、新規有効成分の農薬が開発されているが、グローバルに展開していくには製造コストが課題になる。生産ボリュームは小さいが生産するための設備投資が大きいため、自社生産ではなくカスタム製造の受託先を求める企業が増えているという。大規模なバルク生産に特化する印企業が多いなか、サジャンはこうした高付加価値品の委受託ニーズも取り込んでいく考え。すでに欧米企業2社から同様の受託契約を結んでいるという。日本での売上高は同社全体の数%にとどまるが、数年内に25%まで拡大する目標だ。

今後の需要増に備え、グジャラート州に新工場を設ける計画。4000万～5000万ドルを投じてマルチパーパス対応の製造施設を新設し、既存工場も増強する。

ステア・ジャパン

2軸混練押出機で対日攻勢

河野省三
代表取締役

インドの2軸混練押出機大手メーカーであるステア・エンジニアリング（本社・バンガロール）の日本法人、ステア・ジャパン（東京都）は、樹脂コンパウンダー向けに積極的な市場展開を実施している。昨年4月にオープンしたテクニカルセンター（横浜市）をはじめ、新製品投入などで顧客サービスを充実させ、一段と市場攻勢を強める考え。

ステア・ジャパンは2005年の設立で、2軸混練押出機や、消耗部品であるスクリューエレメントなどを樹脂コンパウンダー向けに販売してきた。13年度は同押出機を7台、14年度に14台、15年度以降は20台を安定的に販売する計画。その実現のため人員増強や、テクニカルセンターで実機を用いたテスト生産などで、きめ細かい顧客サービスを実施している。

近年、自動車をはじめ家電、情報通信機器などに採用されるプラスチック部品は高精度化、薄肉化、高機能化が進む。それにともない樹脂ペレットに各種添加材を混練する2軸混練押出機にも高品質化が求められてきた。すでに同社の押出機は耐摩耗性、耐食性に優れる特徴から市場評価が定着してきた。なかでも押出機本体に加えて、中核部品であるスクリューエレメントを鋳造から加工まで一貫生産できる強みを生かし、差別化戦略を展開している。

今春は世界初となる変速機付き2軸混練押出機「メガ・スペシャル・プラス」を日本市場に投入する。一般の押出機はモーター、減速機、押出機で構成され専用機として使用するケースが多く、生産品目が限定されていた。

しかし、開発品は変速機を搭載したことで、モーター速度を5段階に選択でき、1台で2台分の対応が可能。これにより設備の有効活用に役立つ特徴を訴求していく。

カガシン・グローバル・ネットワーク

日印企業の新たな架け橋に

アヌラグ・スラナ
CEO兼社長

カガシン・グローバル・ネットワーク（本社・ムンバイ）は、農薬・医薬品・ファインケミカル関連の化学産業を中心とするコンサルティング・サービス会社として昨年創業した。化学産業に携わる日系企業とインド企業の架け橋となることを使命に掲げ、関連業界で経営者や現場技術者として活躍してきた少数精鋭のスタッフが日印企業のパートナリングを支援していく。

コンサルティング事業を始めた同社のターゲットは日本。アヌラグ・スラナ最高経営責任者（CEO）兼社長は農薬、ファインケミカル、スペシャリティー・ケミカル業界の企業で25年間の経験を持ち、多数の日系企業と取引してきた実績がある。元インド製薬大手幹部のサティシュ・カンナ会長も、40年以上の医薬品・化学業界経験に加えて、昨年は日本の大学で日本式ビジネスや文化を学んだ経歴を持つ。化学産業に関わってきた両者の知識・経験や日系企業とのつながりを生かし、インドでの事業展開を模索する日系各社にベストマッチしたパートナーを紹介していく。

両者のほかにも海外経験が豊富なアドバイザーを揃えており、「チーム・カガシン」のグローバルなネットワークを活用して合弁事業、マーケティング・技術ライセンス、技術移転、研究・製造委託などの選択肢を提供。契約成立後も企業間のコミュニケーションをきめ細やかにサポートし、大手事務所がカバーできない「パーソナライズド・サービス」として提供する。事業開始から1年未満だが、すでに日印企業5社からコンサルティング委託を受けているという。

共同インターナショナル

「高品質・低価格」の実現支援

新なぎさ 取締役

共同インターナショナル（東京都港区）は、原料の輸出入業務に加え、医薬品の共同開発プロジェクトなどに10年以上携わってきた実績をもとに、日本企業とインド企業がパートナーシップ以上の戦略的な関係を築く支援を行っている。

海外進出を図るうえで最も重要かつ困難なのが「正しいパートナー選び」。経営陣を筆頭にインド、日本、米国などグローバルな人材を揃えている同社は、独自のネットワークとコミュニケーション能力でパートナー探しを支援。日本の製品をインドの生産技術でコスト競争力を高めてグローバル展開するための選択肢を提供し、またインドの優秀な技術者とともに開発・製品化し、先端設備の工場で製造した製品を日本に供給することで「高品質・低価格」という各社の最重要課題を解決していく。昨年から日印間の合弁、技術移転・生産移転、受託製造などを検討するプロジェクト案件が増えているという。

医薬事業以外でもコンサルティング業務を強化する。大手商社の営業拠点がない地方の都道府県では、中小企業がインドへの生産移転や委託生産に関心を持っていながらも情報不足で実現していない実態があるという。同社は先ごろ、こうした地方の自動車部品メーカーなどが参加した国際展示会で商談会をアレンジ。予想を上回る引き合いがあったという。日本から印市場向けの製品供給や、現地企業との合弁事業による技術移転などを提案しながら、海外に活路を見い出す日本のモノづくり産業を支援していく。

モナ

健食主体に日印貿易拡大へ

西村幸浩 社長

インド専門商社のモナ（横浜市金沢区）は、健康食品を軸にインドビジネスを拡大する。オオバコ科植物由来の健康食品「サットイサゴール」で商品ラインアップを拡充する。また、同社の西村光弘会長がこのほどケララ州コーチ市に設立された印日商工会議所の名誉会員に列せられ、従来に増してインドの財界人とのパイプが太くなっている。「これを契機にインド関連の商材の広がりにつなげたい」（西村幸浩社長）としている。

現在の注力商品は、インドの伝統医学、アーユルヴェーダの自然食品のひとつであるサット イサゴールだ。食物繊維含有率が80%と群を抜いて高い。水分を含むと約30倍に膨れてゼラチン状になる。空腹感を和らげながら便通などを改善していく。拡販にあたり、内容量を見直した新パッケージを複数投入する。より使い勝手の良い商品とし、市場競争力を高める。

また、3月内にもインターネット上に自社による直販サイトを開設する。同社が扱う健康食品をフルラインアップで紹介・販売する考え。消費者ニーズの吸い上げにも活用する。

同社は創業以来、半世紀以上に渡り、インドとの商いを展開する。その一方でインドからの技術・管理研修生を支援するといった民間レベルでの交流を積極的に行ってきた。同社会長が名誉会員に選出された印日商工会議所は、研修生のOBが主体となって設立したもの。同社の長年の貢献が評価された。同団体の施設には会長の名を取って「ニシムラホール」が建設される予定だ。インドとの新たなネットワークを生かして輸出入双方で拡大を図る考え。

GVK BIO
Accelerating Research

R&Dバリューチェーンをカバーする
統合ソリューション

GVK BIO はアジアトップの創薬研究機関です。2001年の創設以来、GVK BIO は迅速で品質の高いR&D、製造バリューチェーンでの10年以上の豊かな経験を持っています。綿密なプロセスと先端技術を背景に、当社の技術者チームは、画期的な成果をカスタマーに提供いたします。

提供サービス
- 探索サービス
- 臨床開発
- API R&D、CCS および製造
- 製剤 R&D、製造
- インフォマティックス および分析
- 共同研究

スピード、品質、価格競争力を強みとして、当社は長年に渡り一貫してカスタマーの期待を上回るサービスを提供しております。製薬、農薬、エレクトロニクス、バイオテクノロジー、学術分野などでそれぞれトップ10に位置するカスタマーが、高度な研究について、当社を委託先として選んでいます。

より詳しい情報についてはEーメールにてご連絡ください。

www.gvkbio.com

India | USA | Singapore | Netherlands

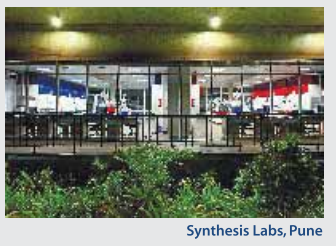
USFDA APPROVED Panoli Site

Multi-purpose Plant 2, Panoli

Solvent Processing Plant, Bangalore

USFDA APPROVED Banglore Site

Acoris Research, Pune



Synthesis Labs, Pune

ハイカルは医薬原体・中間体、特殊化学品で多くの企業の受託パートナー（受託研究、受託製造）として展開しているトップクラスの受託専門会社です。質量ともに優れた研究陣（204名）とAPI工場を継ぎ目のない技術移転で結び、トラブルのないプロセス開発、製造をいたします。インド企業として、この分野で最初にRC（レスポンシブルケア）とRx360の認証を受けています。PMDAの認定も受けています。

お客様の信頼がハイカルの製品です。

・Contract Research
・Contract Manufacturing
・Intermediates & APIs

Experience the right chemistry at Hikal
HIKAL®
E-mail: toshiaki_hashimoto@hikal.com
www.hikal.com